

『SaaSを、ひとりでつくる。』 公式ダイジェスト

10分でわかる ひとりSaaSの全体像

コードが書けなくても、副業でも。

Claude Cowork × AWS で、“あなたのSaaS”をつくる。

この冊子は、書籍『SaaSを、ひとりでつくる。』（全8章＋付録）のエッセンスを、通して読める形にまとめた公式ダイジェストです。「アイデアはあるのに、形にできない」——そんなあなたが、非エンジニアのままAIと“ひとりSaaS”を立ち上げるまでの道のりを、10分で追体験できます。

中塚 敏明

スキルティ株式会社 代表／AIマネジメントスキル協会 理事

- 01 なぜ、この本が生まれたのか
- 02 あなたは「指揮者」になる —— 相棒Cowork
- 03 三つの土台と、最初の壁の越え方
- 04 結果の9割を決める「伝え方」4つのコツ
- 05 安全に世へ出す —— データは敷地の外に出さない
- 06 ゼロから“お客様に届ける”6つの型
- 07 “動くMVP”が仕事を変える／費用の目安
- 08 本当の主役は「AIをマネジメントする力」

01 なぜ、この本が生まれたのか

「SaaSはひとりでは無理」。 そう思っていた私の、どんでん返し。

私が営むスキルティ株式会社は、社員のスキルを見える化するSaaS「skillty」を、外部の開発者に数百万円をかけて作ってもらいました。コードの中身は分からないまま、それでも事業は回っていました。あの日までは。

ところが**2024年、頼みの綱だった開発者が、ふっといなくなった**。残されたコードは誰にも読めず（社内では「スパゲッティ」と呼ばれました）、ボタン一つ直せない。新しい要望に「できません」、直すにも「いくらかかります」。この“できない・わからない・いくらかかる”の三重苦で、私のシステムは**二年間、完全に止まりました**。アプリ化には数百万円と言われ、私は一度、静かにあきらめかけたのです。

転機は、**Claude Cowork**という新しいAIとの出会いでした。チャットで話しかけるだけで、システムを丸ごと面倒みってくれる相棒。二年間だれにも直せなかった不具合を直し、増えなかった機能を、少しずつ確かに増やしてくれた。コードを一行も書けない私が、AIを“指揮”して、止まっていたシステムを甦らせ、やがてゼロから新しいSaaSまで作れるようになったのです。

非エンジニアの私が、AIとたった3か月で

約38万行

コードは書かず、AIに実装させた。

= 従来の受託開発なら 約6,000万～1.5億円規模の仕事量（試算）

※純増384,782行・外部ライブラリ除く。AIに指示・設計・レビューして実装させた規模です。

かつて外注に払っていた数百万円は、いまや**Claude 月200ドル+AWS 月12ドル**ほど。「あの投資は何だったのか」——そう思うほど、ものづくりの景色は、根っこから変わりました。

02 あなたは「指揮者」になる

自分で書く人ではなく、 AIを“指揮する人”になればいい。

この本のいちばんの発想の転換は、ここです。「自分でコードを書ける人」になろうとしない。作りたいことを言葉で伝え、出てきたものを見て判断する“指揮者”になる。手を動かすのは、いつもAI。あなたは、やりたいことと、よし悪しの判断だけを受け持ちます。

相 相棒は、Claude Cowork

チャットで話しかけるだけで、システム全体の面倒をみてくれるAI。専門用語を知らなくても「こうしたい」「ここがおかしい」と伝えれば、話がどんどん前に進みます。

なぜ数あるAIの中でClaudeか？——ChatGPTやGeminiなど開発に使えるAIは多いですが、多くは“すでに書ける人”前提。CursorやClaude Codeも優秀ですが、コードを軸に操作するため初心者は戸惑います。会話だけで完結するCowork が、非エンジニアの私にはいちばん寄り添ってくれました。

大切なのは、ブランド名で選ぶことなく「自分がいちばん自然に会話できる相棒はどれか」。まずは、気負わず話しかけてみることから始まります。

合言葉は「私は初心者なので、専門用語を使わず、手順を一つずつ教えてください」。
この一言で、AIの説明は驚くほどやさしくなります。

03 三つの土台と、最初の壁

相棒のほかに、必要な“三つの土台”。

きちんと作り、世に出し、動かし続けるには、三つの土台が要ります。名前は難しそうでも、中身は素朴です。

G Git —— 作業の「セーブポイント」

ゲームのセーブと同じ。こまめに記録しておけば、失敗してもいつでも直前に巻き戻せる。保管先は GitHub や GitLab（クラウドの貸金庫）。指揮者の、いちばんの安全網です。

D Docker —— 壊してOKの「実験室」

本番をいきなり触らず、手元に本番そっくりの実験室を作る道具。ここでなら、何度失敗してもお客様に迷惑はかかりません。

A AWS —— 24時間動かす「土地」

サービスを世に公開し、動かし続ける土台。**なぜAzureでもGCPでもなくAWSか**——①情報がいちばん多く調べやすい ②Lightsailなら月12ドルから小さく始められる ③後述のBedrockでデータを安全に扱える、の三つが決め手でした。

正直に言うと、最初の壁は「環境づくり」。でも越え方はシンプルです。

①完璧を目指さない ②初心者だと正直に伝える ③詰まったら“見せて聞く”。

04 結果の9割を決める「伝え方」

AIへの伝え方、4つのコツ。

同じAIでも、伝え方次第で結果は激変します。私の実感では、**できあがりの9割は「伝え方」で決まります**。コツは、たった四つ。

1 「何を・なぜ」をセットで伝える

「更新日が近い客を赤く」だけでなく「解約を防ぎたいので、更新日が近い客を赤く」。目的を添えると、AIは「三日前に通知も出しましょうか」と気を利かせてくれます。

2 大きな注文は、小さく分けて頼む

「システムを作って」ではなく、料理のコースのように「まず一覧画面→次に検索→次に登録」。小分けは、失敗を小さく抑える知恵でもあります。

3 わからない言葉は、その場で聞き返す

「その言葉を、専門用語を使わず教えて」。人の専門家と違い、AIには何度でも遠慮なく聞ける。この“聞き返す勇気”が最強の武器です。

4 うまくいかないときは“見せて聞く”

責めても直りません。エラー文はそのまま貼り、画面はWin+Shift+Sで撮って見せる。最近は声で話しかけて頼むこともできます。状況を正確に見せれば、AIはいくらでも付き合ってくれます。

05 安全に、世へ放つ

「コードは読まない。でも、データの通り道は、人が握る。」

中身づくりはAIに任せていい。けれど、**お客様の大切なデータをどこで扱うか**という判断だけは、指揮者であるあなたが必ず握ります。ここが“危なっかしくない”理由です。

壁

Bedrock —— 自社の敷地の中でAIを動かす

お客様のデータを、街中の便利なAIにそのまま送れば、管理の外へ出てしまう。AWSのBedrockを使えば、自社の“鍵のかかった敷地”の中でAIを働かせられる。書類を社外に出さず、会議室に専門家を招くイメージです。

記

DB（データベース）＝サービスの「記憶」

会員・投稿・履歴などが記録される心臓部（例：MySQL）。守りの鉄則はたった二つ。①**毎日バックアップを残す** ②**データは消さずに“非表示”で残す（論理削除）**。取り返しのつかない事故を防げます。

線引きはシンプル。「手を動かす仕事」はAIに任せ、
「どこで何を扱い、何を世に出すか」の判断と責任は、人が握る。

ゼロから“お客様に届ける”、6つの型。

- STEP1** 作れるか見極める：やりたいこと（要件）をAIに読ませ「これで作れる?」と聞く。特別な重い技術がなければ、たいてい作れる。
- STEP2** 設計は借り、コードは借りない：将来“売れる・譲れる”ように、まっさらから書き起こす（クリーンルーム開発）。
- STEP3** 全体像を描く：作る場所（PC）／保管庫（GitHub）／本番（AWS）を分ける。
- STEP4** 毎日のサイクルを回す：作る→手元で確認→保存→公開→本番で最終確認。「試してから出す」。
- STEP5** 文脈ごと手渡す：CLAUDE.mdと引き継ぎ書で、AIが“第三の開発者”として引き継ぐ。
- STEP6** 資産としてためる：URL・商標・使った部品の一覧を残し、“売れる・譲れる状態”を保つ。

“動くMVP”が、大手のコンペを覆した

ある大手メーカーのコンペ。評価制度まるごと／ドラマ仕立て研修動画という大手2社の重厚な提案に対し、私たちはClaudeで数日で作った**“動くMVP（最小限の試作品）”**を持参し、競り勝ちました。完璧な企画書より、動く試作品ひとつ。「まず、動くものを見せる」——これが、AI時代の新しい提案の形です。

費用の目安：“ひとりSaaS”の固定費は、Claude 月200ドル＋AWS 月12ドルほど＋保管庫は個人利用なら無料。月に数百ドルから“作る側”に回れます。（金額は執筆時点の目安）

本当の主演は、技術ではなく 「AIをマネジメントする力」。

1 あきらめなくていい

コードが書けなくても、外注に頼れなくても、AIという相棒がいれば“あなたのSaaS”はちゃんと作れる。

2 小さく試して、確かめてから、次へ

いきなり大きく作らない。一枚の画面から小さく試す。転んでもGitで巻き戻せる。だから、怖くない。

3 「任せる」と「握る」の線引き

手を動かす仕事はAIに任せ、判断と責任は人が握る。この“AIをマネジメントする力”こそ、職種を問わず、これからの武器になる。

三十年前にC言語を少しかじっただけの、コードの書けない私にできたのです。
あなたに、できないはずがありません。

——ここまでが、ダイジェストです。本編（全8章＋付録『ゼロから始める・かんたん手順書』）では、実際の“頼み方”の実例、環境づくりの越え方、DBの扱い、そして一日での納品まで、手を動かせる形で詳しくお話ししています。あなたのアイデアが動き出し、誰かの役に立つ日を、心から楽しみにしています。

中塚 敏明

『SaaSを、ひとりでつくる。』 著者／スキルティ株式会社 代表